千葉大学教育学部研究紀要　第51巻　439～448頁（2003）

〈心を置く〉という和歌

―藤壺の独詠歌を考えるために―

鈴木宏子
千葉大学

On waka, "kokoro wo oku"

― for the study of waka work composed by Fujitsubo ―

Hiroko SUZUKI
Chiba University

キーワード：源氏物語 (Tale of Genji)　平安和歌 (Waka in Heian period)　心を置く (Kokoro wo oku)　古今和歌集 (Kokin wakashu)　藤壺 (Fujitsubo)

一、藤壺の歌の解釈についての疑問

『源氏物語』「花の宴」巻の冒頭近くに、藤壺中宮が詠じた次のような歌がある。

おほかたに花の姿を見ましかば露も心の置かれましやは　（花の宴・三五五頁）

三月下旬、南殿で行われた桜の宴で、光源氏は春鶯囀の舞を披露した。比類ない舞姿は、桐壺帝はじめ居並ぶ貴族たちを魅了して止まないが、一人藤壺は「中宮御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みたまふらんもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづから思しかへされける」という複雑な感懐を抱く。冒頭の歌はこの感懐に引き続いて詠まれるもので、藤壺唯一の独詠歌である。

この歌について、『小学館新編日本古典文学全集』（以下『新編全集』と略称）は、

もしも世間の人並にこの花のようなお姿を見るのであったら、露ほどの気がねもなく心ゆくまで賞賛することができたであろうに

と訳して、

前の「おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えまし」（紅葉賀）と同じ発想で、源氏を「花」ととらえる。「露」は「花」の、「置く」は「露」の縁語。「…ましかば…まし」の構文で、実際には人並に源氏を眺められぬとして、彼への秘めた思いを詠んだ歌。

という注を施している。『新編全集』が引用する「おほけなき心の…」は、「紅葉賀」巻において、源氏の青海波の舞を見た直後に現われる藤壺の心内語で、おおよその意味は「密通という逃れがたい現実がなかったなら、源氏の舞が一層すばらしく見えるのに」というもの。(*1)『新編全集』は当該歌を、「紅葉賀」の心内語を歌の形にトレースしたものと考えていることになろう。『新編全集』の解釈は現在の主流といってよく、他の注釈書を参照しても、

○『対訳源氏物語講話』（島津久基氏）(*2)…今日のめでたい桜の御宴に何の由縁もない外人としてあの美しい花の姿を眺めたのだったら、露ほどの気のおかれる憂さもなく、心ゆくばかり観賞出来たであらうものを。

○『源氏物語評釈』（玉上琢弥氏）(*3)…特別関係がなくて、この美しい姿を見るのだったら少しも気がねをする事はあるまいに（この歌は事実に反する想像。事実は「おほかたに花のすがたを見」ていないから「心がおかれ」、気がねしなくてはならないのだが、その反対のことを仮想して、切ないお心をお詠みになったの

である）。

○『新潮古典集成』（石田穣二氏・清水好子氏）[*4]…特別ないきさつなしに、この美しい姿を見るのであったなら、何の気兼ねもいらないであろうのに。「花の姿」は、眼前の源氏をよそえていう。「つゆ」は、ほんのわずかの意と「露」を掛ける。「花」と「露」、「露」と「置く」は縁語。

といった解釈が行われている。

このような解釈について、私は二つの疑問を抱いている。一つは「おほかたに…見ましかば」という上句を、密通という特殊な事情なしに人並みに源氏を見るなら、と解釈する点。この解釈では、藤壺は「おほかたに見る」ことをあらまほしく思っていることになる。しかし、一首の歌として見た時、「花の姿を大方に見たい」という措辞はいかにも奇妙ではないか。工藤重矩氏[*5]は「おほかた」という語について考察して、「おほかた」の基本語義は「全体・一般」であり、「常に言外に「個・特殊」の概念が対概念として含められているのであって、真意はむしろ言外の「個」の方に存する」と述べている。和歌とは、「おほかた」ではあり得ない個の思いを詠むものなのである。無論、藤壺という人物の特殊な境遇から生まれた特異な物言いである、と説明することもできようが、再考してみる必要があるように思う。

もう一つは下句の「心を置く」の解釈について。通説では上句との関係から「（世間に）気がねする」意に解しているが、当該歌に限らず、このことばは意味の広がりのある、注意を要するものなのではないか。

そうした疑問を抱きつつ注釈史を振り返ると、現在の解釈に至るには、幾つかの屈折があったことがわかる。旧注においては、例えば『細流抄』[*6]には次のような注がある。

○細流抄…藤壺の歌也　心得がたき歌也　古今「露ならぬ心を花にをきそめて風吹ごとに物おもひぞつく」心は花は咲をも散をもしらずがほにてあるべきを露のごとく花の上に心ををく故によしなき物思ひのあると也　此歌にて心得べし

今源氏の姿のすぐれたるによりて心にかかれると也　大かたならましかば源のうへをさまざまおもふ事もあるまじと也

『古今集』の「露ならぬ心を花に置きそめて風吹くごとに物思ひぞつく」（恋二・五八九・紀貫之）を証歌としながら、源氏の素晴らしさゆえに「心にかかれる」―「心を置く」に対応する―と解釈している。こうした捉え方は、概ね旧注に共通するものであった。これに対して『源氏物語玉の小櫛』[*7]は、

○玉の小櫛…此大かたは源氏君の舞を密通の事なくて、ただ大方の世の人にて見たらばと也　紅葉賀の四のひらに、大かたには、とあるところにいへるに同じ

考へあはすべし

と、「おほかたに」を「紅葉賀」巻の記述と照応させ、「密通の事なくて」とする読み方を示した。さらに萩原広道『源氏物語評釈』[*8]は、

○源氏物語評釈…歌の心は大かたの世ノ人にて源氏君の花のごときすがたを見たらば露ほども心のおかれてうしとおぼゆる事はあるまじきにと也　花の縁に露といひ露の縁におかれといふおのづからの縁語也　細流いたくたがへり　引れたる歌もさらにかなはず

と、現在に繋がる解釈を提示している。「心を置く」については、特に訳語を示していないが、『細流抄』の説を引き歌ごと否定していることから判断して、現在の「気がね」に近い捉え方をしているのであろう。

このような注釈史を視野に入れつつ、前述の疑問に立ち戻ってみたい。まず第一の疑問について。当該箇所を読む時に「紅葉賀」の試楽の場面を想起することは、作中人物たちがその折を振り返っていることからも、二つの場面の描写が酷似しており、後者が前者を踏まえて書かれているらしいことからも、必要な手続きであると思う。ただし藤壺の歌は、指摘される「おほけなき心のなからましかば…」という心内語よりも、試楽の翌朝に源氏と交わした贈答歌の末尾の「あはれとは見き／おほかたには」――あなたの舞に人並みには感動しました（それ以上の思い入れはありませんよ）――という言葉[*9]に、直接的に結びつくのではないだろうか。「紅葉賀」において、藤壺は、源氏の舞に対する自分の感動は「おほかた」であると言って、源氏との間に距離をおこうとしたが、「花の宴」では、そうした自身の言葉を振り返りつつ、源氏の姿を本当に「おほかたに」見るのであったら…と、特別な思い入れをせずにはいられない己れの心の深層に降り立っていくのである。

そして、上句をこのように解釈すると、もう一つの疑問である「露も心の置かれましやは」の捉え方も自ずから異なってこよう。

藤壺の独詠歌については、「紅葉賀」から「花の宴」への流れに即して読んでいく必要があるが、その角度からの考察は別稿に記したい。[*10]以下、小稿では、下句の「心を置く」ということばに焦点を絞り、平安時代の歌に見られる例を検討しおお

よそのあり方を明らかにした上で、再び藤壺の歌に向かい合ってみたい。

二、〈心を置く〉の意味

〈心を置く〉について、『日本国語大辞典(第二版)』は次のように分けて説明する。

○日本国語大辞典(第二版)

①心にかける。配慮する。念頭に置いて事をする。続日本紀・天応元年二月一七日・宣命「如此あらむと知らませば、心置きても談らひ賜ひ、相見てましものを」

②心をあとに残す。執着する。執心する。源氏・葵「とまる身も消えしも同じ露の世に心をくらむほどぞはかなき」

③自分に気がひけるようなことがあったりして、改まった態度をとる。曾丹集「夏ばかり賀茂の河せに過してんふるさと人はこころをくとも」

④相手に対してわだかまりの気持を抱く。イ心の隔てを置く。うとうとしくする。よそよそしくする。伊勢物語・二一「けしう、心をくべきこともおぼえぬを、何によりてかからむと、いといたう泣きて」ロ警戒する。用心する。気を許さない。源氏・帚木「すきたわめらむ女には心をかせ給へ」

(紙幅の関係上用例は一つのみにした。)

対象に「心をかける」(①)ことと「心の隔てを置く」(④イ)ことでは、感情の質は随分異なるようにも思われるが、〈心を置く〉とは、その両極を包摂した概念であるらしい。『角川古語大辞典』には、この両極を明確に示した分類が見られる。

○角川古語大辞典(用例は省略する)

①対象に、心をかける。

イ気をくばる。注意をこらす。配慮する。ロ心配する。気がかりに思う。気にする。ハ執着する。執心する。

②対象に、距離を置いて思う。心の隔てを置く。

イわだかまりの気持を持つ。うとうとしくする。よそよそしくする。ロ改った態度をとる。遠慮する。気がねする。ハ警戒心を持つ。用心する。

ちなみに『源氏物語』の古注にも、

○岷江入楚「聞書」(*11)…心をくといふは隔心とまた心をかくるかたと二つ也　公界むきに花を見ば何とも有まじき也　心をかくる故にさまざまあつかはるる也

といった発言があり、『角川古語大辞典』の認識と重なっていることがわかる。

辞書の記述から考えると、〈心を置く〉の意味は「心をかける」と「心を隔てる」の両極にふれるが、その本質は、好悪いずれの感情に裏打ちされるにせよ、心がすらすらと流れていかず、ある対象の上に滞りわだかまること、と理解される。配慮も執着も用心も、対象に注意を払って意識を集中するという点では等しいのである。

〈心を置く〉の本質をそのように捉えた上で、実際の用例にあたっていくと、解釈に悩む場合が少なからず出てくる。「心をかける」と「心を隔てる」という両極のどちらに寄っているのか、判断に迷う例があるのである。例えば『古今集』の次の歌。

立ち返りあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白波

(古今・恋一・四七四・在原元方)

この歌は現在、寄せては返す沖の白波のようにいとしく思い続けている、離れていてもあの人に心をかけながら、と理解されている。しかし遡ると、『教長古今集注』(*12)には、

○教長古今集注…コノココロヨキツトイヘルコトハ、コノココロヲモヒナラセルハ、心ヲヘダツト思ヘリ。コノウタ、シカニハアラズ。コレハ、心ヲカノ人ニトラセツトイフ心ヲ、人ニツグルナリ。

という記述があるものの、『顕註密勘』(*13)の顕註の部分では、「此歌の心は、あはばやと思ふ人の、われに心をきてうちとけぬをうらめしとおもへど…」と、〈心を置く〉を「心を隔てる」の意にとっており、密勘は、「人に心をおきつしら浪とは、人に心をかけたりとよめるとこそきき侍りしか」と反駁するというように、なお解釈に揺れがあったことが知られる。

同様のことは現代の注釈書にも見られる。例えば『後撰集』の例。

大輔が後涼殿に侍りけるに、藤壺より女郎花を折りてつかはしける　右大臣

a折りて見る袖さへぬるる女郎花露けき物と今やしるらん

返し　大輔

bよろづよにかからん露を女郎花なに思ふとかまだきぬるらん

又　右大臣

cおきあかす露のよなよなへにければまだきぬるとも思はざりけり

返し　　大輔

d今ははや打ちとけぬべき白露の心置くまでよをやへにける　（二八一～二八四）

右大臣は藤原師輔、aは師輔から女への歌。

女郎花を手折る―貴女を我が物として以来、私の袖はこんなにも涙に濡れているとご存じですか。

それに対してbは、

私たちの関係はずっとこうして続いていくはずなのに、何を思って早くも涙に濡れているのですか（もう恋の終わりだと思っているの）。

と答える。男は女の「まだきぬる」ということばを踏まえて、再びc歌を贈る。

貴女に逢えぬまま起き明かす夜々を経てきたので、まだきぬる―早くも寝たなどとは思わなかったことです。

最後のdに問題の〈心を置く〉がある。この歌を『岩波新大系・後撰集』（片桐洋一氏）[*14]は、「溶けてしまう白露が、そんなに早く置くほどに、もはや今は夜を重ねたのでしょうか。もはやうちとけているようにおっしゃるあなたが、私にご執心なさるほどに夜を重ねたのでしょうか」と、〈心を置く〉を「執心する」ととる。一方『和泉古典叢書・後撰集』（工藤重矩氏）[*15]は、「今はもう心を許してよいはずですのに、そうしないで、あなたが私に隔て心を持つほどまでに私と逢わない夜が過ぎたのでしょうか」と隔心の意としている。私は、

もはや打ち解けてよいはずのあなたが隔意を持つほどに、逢わぬ夜を重ねたのかしら。

と「心を隔てる」意で考えたいが、〈心を置く〉が、取り様によって一首の意が大きく変わってしまう、難しいことばであることがよくわかる例である。

三、「心をかける」と「心を隔てる」

さらに視野を広げてみよう。『新編国歌大観』のCD―ROMで検索すると、〈心を置く〉の用例は、『万葉集』の一首を加えて[*16]、八代集、平安時代の私家集・私撰集・定数歌・歌合・物語・日記の中に七十五首見いだされる。それらの歌には、どのような傾向が見られるだろうか。

〈心を置く〉の歌を通覧してまず気づかれるのは、「置く」の縁語である「露」が詠みこまれる歌が非常に多く、五十二例を占めることである。藤壺の歌のように、天象「露」と「ほんの少し」「ちっとも」の意の副詞「つゆ」や連語の一部が、掛詞になる例も多い。同様に「霜」が詠みこまれる歌も五例ある。

露や霜からは、それらが降りる植物が引き寄せられてくる。

女郎花…十五例　菊…十一例

秋萩…二例　紅葉…二例

荻…一例　刈萱…一例

花薄…一例　葛…一例

以上は秋の草木。また、

草…三例　撫子…二例

はちす…二例　春の花…二例

小笹…一例　夏荻…一例

など、少数ながら、他の季節の植物も登場する。ちなみに藤壺の歌は、春の花を読みこんだものであった。〈心を置く〉とさまざまな「植物と天象の組合せ」[*17]が結びついて、多様な表現が成り立つのである。

さて、七十五首の中には解釈に悩む歌も少なからずあるが、私なりに大別してみると、「心をかける」系の歌と「心を隔てる」系の歌が、ほぼ二対三の割合になった。無論、截然と二つの意味に分けられるはずもないし、「心をかける」――配慮・心配・愛着・執着――と「心を隔てる」――遠慮・隔意・用心・警戒――の中にもさまざまなニュアンスの濃淡があろう。そのような限界も念頭におきつつ、当面この二つの系列に読み分けることを手がかりにして、考えてみたい。

詠作時期に留意すると、「心をかける」系の方が先行して登場しており（前掲『日本国語大辞典』でも「心にかける・配慮する」の意が最初に立項され、奈良時代の用例が挙がっていた）、『古今集』および近い時代では、「心をかける」の系の歌が大半を占めている。例えば次のような歌である。

a立ち返りあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白波　（古今・恋一・四七四・在原元方）

b露ならぬ心を花に置きそめて風吹くごとに物思ひぞつく　（古今・恋二・五八九・紀貫之＝源氏古注釈所引）

c ひかりまつ露に心をおける身はきえかへりつつ世をぞうらむる
（後撰・恋一・五三七・よみ人知らず）

d ふたつなき心は君に置きつるを又ほどもなくこひしきやなぞ
（拾遺・恋二・七二一・源清蔭）

e うつろはん色をみよとて菊の花露の心も置けるなりけり（公忠集・四五）

f あかずして今朝のかへりぢ思ほえず心ひとつを置きて来しかば
（寛平御時后宮歌合・一九一／恋歌二十番・右）

g わたつみのふかき心はおきながらうらみられぬるものにざりける
（大和物語・五十二段・宇多天皇）

aとbは『古今集』入集歌。『古今集』に見られる〈心を置く〉はこの二首のみで、いずれも「心をかける」意と解釈される。d、e、gの作者は『古今集』の同時代人である。aからgはいずれも、対象に愛着を感じ愛情を注ぐ、つまり「心をかける」意の歌と考えられよう。これらのうちa、d、fの三首には、「身」は遠く離れていても「心」だけはあなたのもとに置いてある、という発想が見られる。「心」を形あるもののごとくとりなして、それを恋人のもとに「留め置く」というのである。「身」と「心」の乖離という発想はいかにも古今集的であり、〈心を置く〉ということばの文字どおりの意味を生かした表現であるともいえよう。このような表現は、この時期に特徴的なものである。bとeは、〈心を置く〉という心象と「露が置く」という物象とを重ねた、平安時代を通じてしばしば見られるパターンの歌である。

一方「心を隔てる」系の歌は、前節で検討した『後撰集』の師輔・大輔の贈答歌あたりから見られるようになる。特に「女郎花・露・〈心を置く〉」というパターンの歌は好まれたらしく、「心を隔てる」系の和歌が増加する要因の一つになっているようだ。

a 女郎花にほふあたりにむつるればあやなく露の心置くらむ
（拾遺・秋・一五九・大中臣能宣）

b 吹く風になびくものかは女郎花露の心も置かせざらなん（元真集・二二三）

c 君をしもよくともなきに女郎花露の心を置かれぬるかな（公任集・八七）

d みよし野のかたちの小野の女郎花たはれて露に心置かるな
（散木奇歌集・三九八＝堀河百首・六一六／女郎花）

e 年をへて露のむすべる女郎花いまさらに又心置かるな
（堀河百首・六二〇・永縁／女郎花）

f 白露や心置くらん女郎花いろめく野辺に人かよふとて
（金葉二・秋・二三二・藤原顕輔）

g 女郎花夜の間の風に折れふしてけさしも露に心置かるな
（金葉二・秋・二三三・藤原忠通）

aは、このパターンの勅撰集における初出である。『能宣集』では当該歌に「同じところに人々の家あり、前栽のもとに人々などゐてはべるに」という詞書が付されており、秋草と人々の姿が描かれた屏風歌であったことがわかる。『岩波新大系・拾遺集』（小町谷照彦氏）[*18]では、「女郎花が色美しく咲いている辺りに、親しげに近寄って行ったならば、むやみに露が気にかけて、心隔てをすることだろうか」と訳して、「女郎花」を挟んで「露」と「作者」とが恋の鞘当てをする趣向である、と説明している。女郎花（女）に対して人間（男）が親しげに振る舞うため、女郎花を我が物と思っている露（もう一人の男）が他意を持つというのである。bも近い時期の歌であろう。試みに現代語訳を施すと「吹く風になびいてよいものであろうか、女郎花よ、私にほんの少しの心隔てもさせないでおくれ」となろうか。女郎花（女）・花を吹きなびかせる風（男）・作者（もう一人の男）の三角関係の歌である。「露の心」という歌句を、擬人化された露が抱いている心、であると解するなら、女郎花・風・露という三つの景物のせめぎあいであるとも考えられる。同時期には、『落窪物語』中の屏風歌や「三条左大臣殿前栽歌合」歌など同じような歌が見られ、十世紀後半には「女郎花・露・〈心を置く〉」というパターンがある程度一般的になっていたことが知られる。そうした中でaが『拾遺集』に入集したことは、このパターンが市民権を得る上で決定的な出来事であったと思われる。

cは藤原道長の歌である。道長たちが嵯峨野に出かけた日、どういう理由からか都に留まった公任は、「いざなはでいくやなになる女郎花わきて一もと野辺のあたりを」と詠じた。これに対する返歌であり、『岩波新大系・平安私家集』（後藤祥子氏）[*19]は「あなたに限って仲間はずれにする気など少しもなかったのに、とんだ隔て心をもたれてしまったものだ」と訳している。当該歌の「女郎花」は嵯峨野にちなんだ景物であると同時に、「露の心を置かれぬるかな」を導きだす序詞のような働きをしているといえよう。

d以下は院政期の歌である。「女郎花・露・〈心を置く〉」というパターンの歌は『金

葉集・二奏本』に二首、「堀河百首」にも三首見られ、[*20] 女郎花・露・人あるいは風という三者の恋の鞘当ての趣向が、この時期好まれたことがわかる。もっとも、少数ながら、

秋の夜の露ならねども女郎花さく野辺ごとに心をぞ置く
（堀河百首・六二四・河内）

など、明らかに「心をかける」意の歌も存在し、女郎花を詠んでいるから「心を隔てる」意になる、と割り切ることはできない。

女郎花の歌にこのような特徴があるのは、女郎花という景物自体の「をみな」を連想させるという性格によるところが大きいのであろう。同じく〈心を置く〉と「植物と天象の組合せ」が結びつく例でも、菊の場合はむしろ「心をかける」の意になることが多い。

あさなあさなきみに心を置く霜の菊のまがきに色は見えなむ
（好忠集・五一五）

菊の上に心を置きて見つるかなわが身は秋の霜ならねども
（散木奇歌集・五四四）

好忠歌は、朝ごとに置く霜、目に見えて移ろう菊に寄せて、あなたに心をかけているのですから、どうぞ愛情を示して下さいと詠じたもの。俊頼歌は、霜が置くように菊の花に愛情注いでいるというものである。

前節で見た『後撰集』歌のように、〈心を置く〉が贈答歌の中で用いられると、いっそう慎重な考察が必要になってくる。『四条宮主殿集』に、次のようなやりとりがある。

人になたつころ、おなじひとの御もとより、うつろひたる菊の葉に、「まことか」とかきてありければ
aまことには露のあだなはさだめなしいかによそふる菊の花ぞも
返し
bいまは心置きてむ菊の花露もこれには隔つべきかは（初句に「如本」と傍注がある）
又、返し
c心置くといふことのはに知られてききたりとやいはむ露のぬれぎぬ

恋の浮名が立っているころ、なじみの恋人から色あせた菊の葉に「まことか」と書いて寄越したので、女はaの歌を詠む。

本当のところ浮気であるという評判は根も葉もないものなのです。どうして移ろう菊になぞらえたりするのですか。

bは男の返歌。初二句に欠字があってわかりにくいが、〈心を置く〉にからんで二通りの解釈があり得るように思う。

解釈①弁明をきいた今はあなた（＝菊の花）に心をかけましょう、あなた（＝これ）に対して露ほども隔て心も持つべきでしょうか。

解釈②今は不実なあなた（＝菊の花）に用心することにしましょう、私（＝これ）に対して露ほども隠し事をしてよいものでしょうか。

cは再び女の歌で、これにも〈心を置く〉がある。

あなたの「心置く」という言葉によってわかりました。わたしは濡れ衣を着せられていた、と言いましょうか。

b歌の訳は、①の方が妥当であるように思われる。するとc歌は、男の〈心を置く〉という言葉を「隔意を持つ」意に曲解して、「私は疑われていたのですね、ひどいわ」と拗ねてみせているのだろうか。浮気の疑いもスパイスとなるような恋人同士の戯言、なのだろうか。②であるなら、事態は深刻かもしれない。b歌の解釈が安定しないために、c歌の意図するところもよくわからない。後考を期したい。

〈心を置く〉という歌を検討してきた結果、いくつかの傾向が明らかになった。まず〈心を置く〉は、露、霜、植物と結びついて一首の表現を形成している。歌の中での意味は、「心をかける」系と「心を隔てる」系に大別できる。「心をかける」系の歌の方がやや先行し、『古今集』の二首は、いずれもこの意味である。また『古今集』時代には、自分の身体から抜け出した心が相手のもとに留まるという、身と心の乖離を詠じた歌が見られる。「心を隔てる」系の歌は『後撰集』から見られるが、特に「女郎花・露・〈心を置く〉」というパターン、すなわち女郎花と露と人間の三者による恋の鞘当ての趣向が好まれたことで、数が増していくように思われる。結局、平安和歌全体を通覧すると「心を隔てる」系の歌の方が多いが――前節で引用した『教長古今集注』の記述から考えると平安後期の人にとっては「心を隔てる」の意の方がなじみ深かったらしい――「心をかける」系の歌もなくなるわけではない。『源氏物語』は、『古今集』の規範が厳然として存在する一方、「女郎花・露・〈心を置く〉」というパターンも定着しつつあった時代の作品である。

〈心を置く〉について、解釈のための一定のルールというほどのものは見いだせない。やはり、個々の用例ごとに文脈の中で柔軟に考えていくのが、最善の方法であるようだ。こうした考察を参考にしつつ、再度冒頭の藤壺の独詠歌に立ち戻ってみよう。

四、再び藤壺の歌へ

「花の宴」巻の藤壺の独詠歌は、

おほかたに花の姿を見ましかば露も心の置かれましやは

というものであった。前述のとおり私は、この歌の上句を、「紅葉賀」における彼女の源氏に対することば「…あはれとは見き／おほかたには」を直接に受けたものだと考えている。そして下句の〈心を置く〉は、通説のような「気がねをする」―つまり、心を隔てる系の意ではなく、心をかける系の意、つまり「執心・愛着」といったニュアンスになるのではないかと思う。次のような現代語訳を提案してみたい。

○現代語訳私案

（私はかつて「おほかたにはあはれとは見き」と答えたのだった、しかし）もしも並ひととおりに花のような姿を見るのであったら、露ほども執心されることがあるだろうか（「おほかた」でなどあり得ない、花に露が置くように、私は特別な思いをこめてこの人を見つめずにはいられないのです）。

このような解釈が成り立つかどうか、検討しなければならないことが、なお二つある。第一は、「露も心の置かれましやは」の助動詞「る」についてである。当該歌では、〈心を置く〉に自発の意の「る」が接続しているのだが、このような例は他にあるのか、そしてその場合の〈心を置く〉は「心をかける」と「心を隔てる」のどちらの意味になるのだろうか。[*21] 第二は、『源氏物語』の和歌における〈心を置く〉のあり方についてである。

第一の問題について。〈心を置く〉に接続する助動詞「る」は、「受け身」の意である場合の方が多く（人に隔意を持たれる、という歌である）、自発であろうと考えられるのは、私見では次の五首であった。

a　しものしろきつとめて、人のもとより

けさはしもおもはん人はとひくまじつまなきねやのうへはいかがと

かへし、よりのぶ

つまなしといふはまろやはかずならぬきくにしもこそ心置かるれ

（和泉式部正集・一九八～一九九）

aの贈答歌について、『和泉式部集全釈』（佐伯梅友氏・小松登美氏・村上治氏）[*22] は、贈歌を和泉式部の歌ととり、三句を「とひてまし」として解する。歌意は、もし私を本当に愛しているなら、霜が降りた今朝こそ、夫のいない小さな家で（「つまなき」に「（軒の）端なき」と「夫なき」が掛かる）あなたはどうしているの、と言ってくれるでしょうね、となる。対して返歌は、「夫なし」などと言われると、私は物の数ではないように思われて「心置かるれ」というもの。「心置かるれ」については「打ちとけられない気持がする。気になる。おもしろくない」という注を施す。小稿の分類でいえば「心を隔てる」系となろう。

b　八日、しもより、むま、こぞくらべし菊につけて

今年さへ露は心ぞ置かれけるその折なりし枝ぞと思へば

かちにしかたなれば、進

きくのため折しる露の心置かばすぎにし秋のこころまさらむ

（大斎院前御集・三六一～三六二）

bも贈答歌である。九月八日に、斎院女房の一人である「むま」が、昨年の菊合の菊につけて歌を送ってきた。第三句に「心ぞ置かれける」という表現が見られる。次のような訳が考えられようか。

解釈①今年になってまでも、露ならぬ私は、菊の花に愛着が感じられることです。去年の菊合の折の枝だと思うと。

これは「心をかける」系の解釈であるが、返歌によって、去年の菊合では負けてしまったこともわかるので、

解釈②今年になってまでも、露ならぬ私は、菊の花に隔意が持たれることです。あの残念な菊合の折の枝だと思うと。

の意なのかもしれない。この訳なら「心を置く」は「心を隔てる」系である。これに対して、昨年勝をおさめた側の「進」の返歌は、

菊のために折をよく心得るあなたが、露が降りるように愛情を注いだなら、昨秋以上の美しい花が咲くことでしょうね。

と解釈され、贈歌が②の意であるとすれば、「心を置く」の意味をすりかえ返事を

ていることになる。

c とこなつにあだなる花の露なれば心置かれぬ折はなきかな（相模集・四五一）

d 我が恋は小笹が原の露なれやことの葉ごとに心置かるる

（久安百首・四七五・季通）

cは「走湯百首」C歌群の中の一首。A歌群の「我が宿の籬のゆひめあだなれば露にしをるるとこなつの花」（二四九）、B歌群の「とこなつの花生ひしげるませ垣もゆひかためては露ももらさじ」（三四七）を受けるもので、『私家集全釈叢書・相模集全釈』（武内はる恵氏・林マリヤ氏・吉田ミスズ氏）[*23]では、

なでしこの花に対して、いい加減な露なので、花を傷めるかと気を遣わないでいられる時なんかないのですよ（私に誠意のない夫なので気の安まる時はないのですよ）。

と訳して、「心置かれぬ」については「気がつかわれない、「れ」は自発の助動詞」と注をつける。大別すれば「心を隔てる」意であろう。dは、露が笹の葉の一枚一枚に降りているように、恋人のちょっとした言葉、口ずさんだ歌、短い手紙などの一つ一つに「心置かるる」―心にかかり大切に思われる意であろう―と歌っている。ほんの少しの風にも飛散してしまいそうなはかない恋の歌である。さらに、次のような歌もある。

e 秋風の露もおとせずすぎぬれば荻の上葉ぞ心置かるる　（肥後集・一〇三）

この歌には「ひさしうおとせねば、斎宮のかうちがもとに」という詞書がある。「あなた（＝秋風）からほんの少しの音信もなく日々が過ぎたので、私（＝荻の上葉）はどうしたのかしらと気がかりに思っています」といった意であるが、下句を「……私を嫌いになったのかしらと、隔て心を持ってしまうことです」と、隔心の意にアクセントをつけて解釈することもできよう。このような歌に対するときは、「心をかける」と「心を隔てる」の二分類は、かえって足枷になってくる。

見てきたとおり、自発の「る」が接続した「心置かる」という形は、そもそも用例も少なく、解釈も難しいのだが、やはり「心をかける」意、「心を隔てる」意の両様の場合があり得るのではないだろうか。

第二の問題について。『源氏物語』中に、〈心を置く〉を用いる歌は、当該歌以外に二首ある。

aとまる身も消えしも同じ露の世に心置くらむほどぞはかなき（葵・五二頁）

b 行きてみてあすもさねこむなかなかにをちかた人は心置くとも

（薄雲・四三九頁）

bの方から先に確認したい。明石君のもとを訪問しようとする源氏が「明日帰り来む」と催馬楽「桜人」の一節を口ずさんだのを聞いて、紫の上は「舟とむるをちかた人のなくはこそ明日かへりこむ夫と待ちみめ」と、同じ「桜人」のことばに拠りつつ歌う。その返歌がbで、たとえ「をちかた人」が隔意を抱くとしても、明日になったら本当に帰ってきましょう、というもの。小稿の分類でいえば「心を隔てる」系の典型的な歌で、

夏ばかりかもの河せにすぐしてんふるさと人は心置くとも（好忠集・一八二）

のような類例がある。

aは、生霊事件の後、葵の上の喪に服している源氏が、六条御息所に送った歌である。前掲の『日本国語大辞典』をはじめ多くの辞書が、〈心を置く〉の「執着する」意の用例として、この歌を掲げている。まず御息所から「菊のけしきばめる枝」につけて、「人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ」――葵の上が亡くなったことを悲しく聞くにつけ涙がさそわれますが、あとに残ったあなたの袖はどれほど濡れていることでしょうか――という弔問の歌が届いた。源氏はいつもながらの優れた筆跡に感嘆するものの、生霊のまがまがしい印象を脳裏から消し去ることができない。とはいえ返事をしないわけにもいかず、送ったのがa歌である。『新編全集』ではこの歌を、

後に残る者も、消えてしまった者も等しくはかない露の命の世に生きているだけなのに、その露の世にいつまでも執着しているのは、つまらないことです。

と訳して、頭注で、

「心おく」は思いつめる意で、御息所の怨念をも暗示した歌である。

と説明している。悲しみをお察し申し上げますという贈歌に対して、a歌は一見、露のような世に〈心を置く〉のははかないことですね、と一般的な無常の思いを述べて答えているのだが、その実、源氏への執着・愛執という、御息所の最も痛切な秘密を衝いているのである。御息所が、この二重性に気づかないはずもなく（「ほのめかしたまへる気色を心の鬼にしるく見たまひて」）、「さればよ」という絶望的な認識に至る。

先に私は、〈心を置く〉の本質とは、「好悪いずれの感情に裏打ちされるにせよ、

心がすらすらと流れていかず、ある対象の上に滞りわだかまること」であると述べたが、a歌の〈心を置く〉は、まさにこの本質に触れるのではないだろうか。御息所から源氏へ、愛憎ないまぜになった、名づけようもない感情が向かっている。理性を凌駕して源氏の上から離れない御息所の心、そのようなありかたが〈心を置く〉なのであった。『源氏物語』の和歌には、このような、登場人物の心の歴史を背負った〈心を置く〉が見られるのである。a歌は、藤壺独詠歌の〈心を置く〉を考えるとき大きなヒントになるのではないか。

藤壺が源氏に対してどのような感情を抱いていたか、物語は多くを語らない。藤壺の心は、源氏にも、また読者にも、容易には明かされないのである。源氏の存在が、よかれ悪しかれ、藤壺の感情生活をより広く深いものにしたことは、まちがいないのであろうけれど。藤壺の独詠歌は、前述のとおり、

中宮御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みたまふらんもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづから思しかへされける。

という記述に続いている。藤壺の視線はいつのまにか春鶯囀を舞う源氏の姿に吸い寄せられ、「この素晴らしい源氏を憎むなんて」と頑なな春宮女御に対して批判がましい感想さえ抱くのだが、そのように源氏にこだわり肩入れしてしまうこともまた、「心憂し」と顧みられる。この屈折した心中思惟を受けて、

おほかたに花の姿を見ましかば露も心の置かれましやは

が出てくるのである。ふと気づくと源氏の姿を追い、源氏のことを思っている。その場に居並ぶ人々の晴れ晴れとした賛嘆の思いとは異なって、屈折し内向しつつそれでも源氏の上に心をかけてしまうこと、それが、この歌の〈心を置く〉であると思うのである。

最後に、私案を補強するものとして、古注が引き歌として指摘していた紀貫之の歌を挙げたいと思う。

露ならぬ心を花に置きそめて風吹くごとに物思ひぞつく（古今・恋二・五八九・紀貫之／やよひばかりに、物のたうびける人のもとに、又人まかりつつせうそこすとききてつかはしける）

藤壺の歌はやはり、貫之の歌を踏まえつつ詠まれているのではないか。というのは、「春の花・露・〈心を置く〉」という措辞の歌は、調査し得た平安和歌の中で、この二首しかないからである。貫之歌は、露ならぬ深い心を露のように花（＝あなた）に置き初めてから、風が吹くごとに、散りこぼれはしないかという不安がとりついて離れません、との意。〈心を置く〉は「心をかける」系である。木船重昭氏は、藤壺の独詠歌と貫之「露ならぬ」歌の類似を重視し、藤壺歌も「花に露が置く」というつながりに即して、花（源氏）に心を置くと解釈すべきであると述べている。[*24] 考察の過程は異なるけれども、私もそのように考えたい。恋し初めた思いを詠じる貫之歌と、藤壺の独詠歌にこめられた複雑な思いとでは異質であるが、花のような人の上に心が滞りわだかまり、その人のことがいつも心にある、という点で、両者は等しいのである。

＊『源氏物語』の引用は『小学館新編日本古典文学全集』（平成六年）、和歌の引用は『新編国歌大観』によるが、「心を置く」の「置く」を漢字に統一するなど、私に漢字をあてた場合がある。

(1) 「おほけなき心」が、源氏の心か藤壺の心か、説が分かれている。
(2) 矢島書房・昭和二十五年刊。引用は昭和五十八年に名著普及会から復刊されたものによる。
(3) 角川書店・昭和四十年刊。
(4) 新潮社・昭和五十二年刊。
(5) 工藤重矩氏「『古今集』の「おほかたは」の解釈」（『和歌文学研究』昭和五十八年八月）
(6) 『内閣文庫本　細流抄』（桜楓社・昭和五十年刊）
(7) 『本居宣長全集　巻四』（筑摩書房・昭和四十四年）
(8) 『源氏物語古注釈大成四』（日本図書センター・昭和五十三年）
(9) 「おほかたには…」のあとに省略があると見て「おほかたにはあらず」の意であると考える説もある。
(10) 和歌文学会平成十四年十二月例会（於星美学園短期大学）において口頭発表をした。
(11) 『源氏物語古注集成　巻十二』（桜楓社・昭和五十五年）
(12) 引用は竹岡正夫氏『古今和歌集全評釈　古注七種集成』（右文書院・昭和五十六年）による。
(13) 『日本古典文学影印叢刊二二　顕註密勘』（貴重本刊行会・昭和六十二年）

(14) 平成二年刊。
(15) 平成四年刊。
(16) 『万葉集』の一例は「心をし無何有の郷に置きてあらばま姑射の山を見まくちかけむ」（巻十六・三八五一・作者未詳）である。
(17) 拙著『古今和歌集表現論』（笠間書院・平成十二年刊）第一章Ⅲ「古今集における〈景物の組合せ〉―花を隠す霞・紅葉を染める露―」
(18) 平成二年刊。
(19) 平成六年刊。
(20) 「堀河百首」には、女郎花ではなく刈萱を詠んだ「心置く露もこそあれ刈萱のなどたはやすく風にみだるる」（六五四・肥後）もある。
(21) 平成十四年六月の古代文学研究会（於東京大学山上会館）において、小稿の原型にあたる発表をした際に、藤原克己氏からご質問いただいた。
(22) 東宝書房・昭和三十四年刊。
(23) 風間書房・平成三年刊。
(24) 木船重昭氏『源氏物語の研究（續）』（大学堂書店・昭和四十八年）による。

【付記】小稿脱稿後、石井文夫氏・杉谷寿郎氏『私家集注釈叢刊・大斎院前の御集注釈』（貴重本刊行会・平成十四年九月二十五日）が刊行された。小稿第四節で取り上げたbの「むま」の贈歌について、同書は「（去年だけではなく）今年までも、露は（この菊の枝に置くのが）何となく遠慮されるのでした。（去年の菊合で負けてしまった）その折のであった（菊の）枝だと思うと」と解釈している。小稿でいえば解釈②の方になる。